



第5巻第11号
通巻第59号

受け、若しくは賜与することは、国会の議決に基かなければならない。

第二章 戦争の放棄

第九条【戦争放棄、軍備及び交戦権の否認】

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

第三章 国民の権利及び義務

第十条【日本国民の要件】

日本国民たる要件は、法律(国籍法)でこれを定める。

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

朝陽がのぼり、晴れた。
遊びにゆこう。
働きにゆく人は
時計をすれば息苦しくなる。

「サン・オブ・ア・ゴング」という曲の一節だ。一九八五年だったろうか。無論、実際に、時計が首を絞めたりするわけではないけれど、仕事や学校での生活に限らず、人はあれこれと時間に縛られているものである。

一昔、いや、二昔前には、中学や高校の入学祝いと言えば、万年筆か腕時計というのが定番であった。それなりの高級感があり、大人への入り口に立ったような気にさせてくれるアイテムであったように思う。ところが、昨今ではどちらもあり人気があるとは言いがたい。万年筆に至っては、一度も実物を目にしたことがない、という人々も出現し始めている。いや、その方が多数だろう。

若年層の時計や万年筆離れが進んだのは、携帯電話の普及が大きな要因のひとつであることは間違いないだろう。あれは電話であるのみならず、手帳でもあり、時計でもあり、カメラでもあり、メモリーでもあり、財布でも

あり、おまけにファッションでもあり……といった具合で、かなりの進化を遂げた。些か混乱気味のコミュニケーション・ツールとなっている。あれほどの機能を複合的に併せ持つ機器は、そりゃ便利だろうなと思わなくもないけれど、何でもかんでも盛り込んだがゆえに、かえって不便なところもあるし、何より味気なさは増すばかり……これは愚痴か。しかし、である。私たちは携帯電話を使用しているつもりでいながら、実のところ、携帯電話に束縛されているに過ぎぬのではないか。そのように自嘲したくなる瞬間も少なくはない。

初めての腕時計をしたのはいつのことだったろうか。小学校の高学年には母のものを時々借りていた。借り物ではあっても、何となく嬉しかったものだが、それがどれほど役に立ったかという点、大いに疑問が残る。というより、ほとんど役に立っていなかった、というのが実情だ。何しろ、小学生には変則的なスケジュールがあるわけではなく、時間を気にしなればならない場面はほとんどなかった。時間が気になる場所、例えば、教室

(最終面に続く)


からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

今日の紙面から

- 二・三(面) ロンドンレポート
- 怪しげな世界
- 四面(からすライブラリー)
- CD『エマーゼンス』
- 本 『傭兵部隊(ライオン)を追え』
- アート、パレ・ド・トーキー
- 四面(防犯面)
- 不法侵入者
- 五面(hola)
- Dehesa



怪しげな世界



前から気になっていることがある。「アーティストって何だろう？」と言う素朴な疑問。基本的にはオリジナリティーのある物、事を何かを表現するために作る、又はやる人のことなのだろう。そう言う意味では誰もがアーティストであり得ると言える。それは十分に理解できるし納得もできるのだが、それとは別に職業として存在するアーティスト、プロのアーティストがよく理解できなかったのである。音楽や、映画、文学とは別に絵画、彫刻などの一般的にアートと呼ばれる所が、いまいち自分にとってははっきりしなく怪しげな世界だったのだ。それが、こちらでアートの大学に入り、二年生になって自分の勉強の方向性を決める必要性がでて来たところで、ますます混乱をきたした。「第一、どうしたらアーティストになれるのだろう？」そんな事さえもよく分かっていないのだ。どの様な道を辿って、美術館に作品が置かれるのか？どの様にしてエキシビジョンが開かれるのか？本当にただ自分の好きな物を作っているだけならば、知らなくてもいいのだが、将来自分がやりたいことを考える上では、そんな事も知っておく必要がある。



今僕がとっているコースはメタル、鉄、銅、銀などを使って何かを作ると言うもの。ジュエリーとも一線を置いている。そこで職人的な、技術をきつちりとたたき込まれるのかと思えばそうでもない。どちらかと言うと、アイデアの掘り下げ、哲学などと言う事の方が重要だったりもする。では、フライングアートなのかと言うと、それも少し違うような気がする。今、こちらで一般的にアートとして脚光を浴びているのは、絵画でも写真でもないとするに彫刻(スカルプチャー)やフライングアートの枠に入る物が殆どだろう。要するに立体的な何かを使っただけのもの。それは薬品の中につけた牛の輪切りを並べたものであったりと色々。そこで現在シルバースミス、銀細工アーティストとして知られている人々がそのような所で活躍しているのかと思えば、それも違う。多くの人は、花瓶やフォークなどといった物を作っている印象を受ける。それらはアンティーク品のようなハデな装飾よりも、どちらかと言うと何かを表現するという要素が加わった、洗練された物であることが多い。要するにデザイナー、アーティストによるモダン・工芸と言ったところなのだろう。もちろん機能的ではない物、使い道のある物ではない物を作る人も沢山いるのだが、機能的であろうが無かるうが、工芸という要素が加わることによって、フライングアートとはまた少し違った畑になるのである。

要するにそんな畑の違いがこんがらがり、怪しげな世界がますます分りにくくなっているのである。更にエキシビジョンを開く為の計画書の作り方、どの様にして自分を売り込むのかなどのレクチャーを聞いたたりなどして、怪しげな世界の構造は大分見えてきたように思える。まずは自らアーティストだと名乗り、ギャラリーを通して作品を売ったり、エキシビジョンをしたりして、プロのアーティストとして社会に自分を売り込んでいくのである。ミュージシャンならば、レコード会

社と契約を結んだ時点でその後の宣伝活動はレコード会社がやってくれそうなものだが、アートの場合はよほど有名にならないかぎりそれを自分で続けていく必要がある。そこで、学校やエキシビジョンを通しての人の繋がりが、コネのような物も不可欠になるのである。多くの人が望むように、作品をせっせと作っているなか、大金持ちのコレクターや、ギャラリーのオーナーなどに偶然出会い、才能を認められて有名アーティストに...と、言うようなサクセス・ストーリーは現実には、そんなに頻繁に起こらなそうである。一方では、価格の不確かさと言う事実がある。文学は本、音楽はCDという媒体物(の値段は決まっているのに対して、アートは物そのものを売るのでその値段は実に不確かなものだ。加えて、芸術作品は大量生産する事によってその価値も下ってしまう。良い曲だからCDが高くなることはなく、本を沢山刷ったからと言って、誰も見向きもしなくなる事はないのである。

これらの事が頭の中で整理がついて行くにしたがって、取りあえずアートの世界にかかった霧は大方晴れたように思える。怪しげな世界は、やっぱり怪しかった気もするし、思ったより怪しげな物でもなかった気もする。よく考えてみれば、アーティストとのその活動と、フリーランスで仕事をする人の基本は同じようにも思える。その世界の入り口に入ってみただけで、思ったよりもその空気は気持ち悪いものではなかった。それでもまだ、何かあるような気がする。怪しげな世界の原因。何が問題なのだろう？ しばらく考えた後に、問題は、人だったことに気が付いた。学生にありがちなのか、自分が何をやるのかどんな仕事をするのかと言う事よりも、自分がアーティストである事ばかりに一生懸命な人に、嫌な奴が多いのは気の所為だろう



か？ 自分の作品やアイデアを一生懸命売り込む人という意味ではなく、自分がアーティストだという意識が必要以上に強い人である。それを考えると、こちらは日本に比べて、良い意味で他人に無関心なのは大変有り難い。人は人、自分は自分なのである。特に、組織やコミュニティに描いてそれを感じる。そう言う意味で、こちらでゼロからアートを学べるということは大変ラッキーだったことに気が付いた。必要以上に強い、アーティストだという意識の毒気に息苦しい思いをする機会は確実に減ったはずである。

アートの好き嫌いはもちろん、人によってあるだろう。ただそのよく分らない世界を、怪しげなものにするのは価格なのか、その構造なのか、それとも過剰な意識なのか、一般ではどのように感じられているのか、実に興味深いところである。



『Emergence / Tania Alexandra』

Tumbletat Publishing Co.

2003年、TPC6693



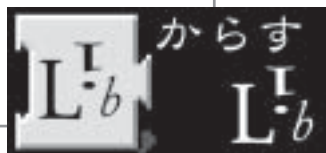
CDs

コンピュータによるレコーディング・システムが普及したおかげで素人と玄人との境界は限りなく曖昧になり、インターネットのおかげで海外のインディーズものを入手することは、例えば、ジャイケル・マクソンのようなメジャーなアーティストのアルバムを手に入れるのと大差がなくなってきた。

スタイルとしてインディーズを装っているような嫌らしいメジャーもあるわけで、事態はなかなかややこしくもある。孰れにせよ、インディーズだから、メジャーだから……そういう区分は、もはやほとんど意味をなさない。だが、敢えて言うのなら、純粋なインディーズものの中には、ビジネスの世界では往々にして忘れられがちな、音楽に対する愛がある。ああ、そうさ、気色の悪いような物言いだ、確かに、愛があるのである。じゃなきゃ、やってられないか。

Tania Alexandraのこのアルバムに素直に耳を傾けてみるがいい。何が聞こえる？

(全太)



Art

Palais de Tokyo / Paris

パリのエッフェル塔のそばにあるパレ・ド・トーキョーは、長い間何も使われぬまま放置されていたが、近年、新たな文化と創造の場として、生まれ変わった。建物は、一九三〇年代の合理主義の建物でしっかりとした構成だ。余計な仕上げをそぎとり、その柱や梁、床などをむき出しにして、中にさまざまなインスタレーションを施している。建物を改装する予算が無いことも理由のひとつだが、単なるイレモノのなかに「アート」が場所をつくるということだ。バロック時代からの伝統の中にあるパリの街の中では、とても自由で開放的な雰囲気を感じることが出来る。パリのコレレの会場にもなった。その一角、レストランは、村上隆氏のインスタレーションがレストランのインテリアをかざり、ポップな雰囲気を醸し出していた。こういう街には、よく似合うように思った。

(篠崎健一)

傭兵部隊 ライオン を追え 上・下

ブラッド・ソー

ISBN4-15-041015-1

ISBN4-15-041016-X

早川書房



Books

著者は二〇〇二年に本書でデビューした元テレビプロデューサー。本筋は単純明快なヒーロー物で少々物足りないが、いかにもテレビ製作者らしく、映画になった時の映像が常時目に浮かぶ活字の集まりだ。主人公のスコット・ハーヴァスはホワイトハウスのシークレットサービス、いわゆる大統領の警護隊員。悪の親玉にはめられ、大統領誘拐の汚名を着せられ、単身スイスへ出向いて事件を解決。当然、美女とのロマンスもある。いかにも、米国右寄り作家の誕生と言える。米国右翼作家としては、トム・クラウンシー、ステイブン・ハンター等大勢名を連ねるが、その一角を担う事は間違いないだろう。長時間飛行機に乗らなければいけない場合等、気楽に時間を潰したい時にはお勧めである。

(小張寅蔵)



不法侵入者

最近、下宿先で怖い思いをした。朝ご飯を食べ、身支度をして、さあ出勤しようとしてドアに手をかけてみると、すっとドアが開くではないか。自然と、声もれ、その場で立ち尽くしてしまった。そして、じっと考えてみる。なぜドアの鍵が開いて、しかも半開きなのか????。昨晩は間違いなく鍵を閉めたはずだし、今のままでドアに触ってすらないのに、開くわけがない。いやいや、それは思い違いで、やっぱり閉め忘れたのだからと一応納得して、事務所に向かった。しかし、時間が経つことに不安になってくる。本当に閉め忘れたのだろうか?もし、閉めていたとしたら・・・結局、警察に通報して、調べてもらうことにした。すると、ドアに不審な指紋の跡や、玄関の土間から上がったところに、靴跡らしきものが1つだけ見つかった。それを聞いたとき、身の毛がよだた。寝てる間に見知らぬ人が入っていたのである。そういえば、前の下宿でも、45過ぎのミス大家が、私の寝てる間に、私の家の鍵を勝手に開けて、外に干してあった洗濯物を置いていくという、身も凍るような体験をしたことが何度かある。しかし、今回の場合は生命の危険を伴うから洒落にもならない。すぐに不動産屋に連絡をとって、鍵を交換してもらった。さらにチェーンもつけてもらった。新しい鍵は、KABAという、ピッキングの難しいタイプのものらしい。合鍵を造れるのは、認証番号カードを持った人だけなので、合鍵を勝手に造ることができない。だからといって完全に安心というわけにはいかないが、ひとまずホッとした。余談だが、世の中の鍵の99%は時間をかければピッキングできるらしい。そのうち70%は10秒以内で開けられるとも言われている。私の家の開けられた鍵というのは、鍵屋に言わせると、驚いたことに、ピ

キングするのにちょっと時間を要するタイプで、普通は壊してこじ開けるそうだが、だから、ピッキングよりも、合鍵によって開けられた可能性が高いということであった。さらに、警察官が言うには、泥棒は人がいないときに入るものだから、今回のような夜中に入ってくるケースは珍しいそうだが、以前住んでいた者と関係があるのか、強盗を覚悟した確信犯なのか、ただの馬鹿な泥棒なのか、想像は膨らむばかりである。

犯人は、玄関に一步入ったときに何を考えたのだろうか。「ちつ、男かよ、金もなさそうだし、ここはハズレだな。」とも思われていたのだろうか。案外、汚い部屋は泥棒から命や財産を守ってくれるかもしれない。

最後に、警察官に教えてもらったのだが、音が出たり光ったりする仕掛けが効果的に泥棒を寄せ付けにくくするそうだが、確実に泥棒は潜んでいる(先週、阿佐ヶ谷駅近くでピッキングの被害届があったらしい)わけだし、自分でできることは、やっておいた方がいいにきまっている。皆さんも一度は自分の家の防犯対策を真面目に考えてみてはどうだろうか。

(高橋)



不法侵入者? 上等だ。 まとめてかかってきやがれ。

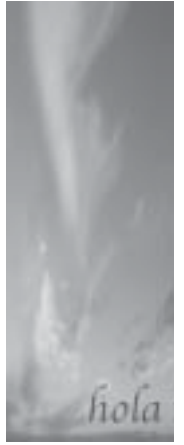
あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。
あなた一人で悩まないでください。

ストーカー バスター

相談無料
秘密厳守
防犯用品販売・
防犯対策指導も
致します。

produced by
P.D.Agency

tora@pda.co.jp
1843 N. Cherokee AVE: APT. #216
Los Angeles: CA 90028, USA
voice : +1-310-493-1001
facsimile : +1-323-466-5645



木々の葉が色づきやがて落ちる。土の中にもぐってひたすら冬の過ぎ去るのを待つ動物たちもいる。やがて湖は凍り木枯らしが吹く。冬は生命が休止する時だと思っている。いくつかの慣習や風物と、かぶらのような冬ならではの食べ物を除けば、これからの季節は、私にとって暗くて寒い辛い時間である。

10月も半ばを過ぎると、マドリッドではコートは言うまでもなくマフラーも必要となる。気温は10度くらいなもので、日本の11月くらいだろうが。冬は目の前である。日の出は遅く、夜は早くやって来る。

マドリッドを南北に貫く大きな通りは、両側に立派な街路樹がならび、中央には歩行者のた



めに木々が立並ぶ。花が咲き、小さな東屋のようなカフェが点在する。パセオと呼ばれる長い公園のような場所だ。木々は色づき、街の風景は確かに冬に向かっていているのだが不思議なことに、反対に息づくような新たな鼓動らしきものを感じる。その若々しさは徐々に空気を伝わってやって来たので、始めはなぜなのかわからなかった。街路樹の下の芝生が、夏には黄色く枯れ草のようだったのに、生き生きとした緑なのだ。時々降る雨に濡れて、一層輝いている。日本の五月や六月の新緑の季節のように、草花が生き始めるときの若い緑である。冬の始まりに、生命の息吹を感じるということ想像していなかった。

夏に訪れた、市郊外の枯れ果てた白っぽい土とどこまでも続く青い空がつくる風景には、黄金色をしたスパルトという草が印象的だった。アフリカから運ばれてきたらしいこの草は、根元から直線的にどの方向にも茎を伸ばして、高さ2メートルほどもある。荒れた大地のそここ

こに、強い光に照らされて、からからになりながらも涼しげに生きている。輝く金色は、有機的な生命にとっては過酷な自然のなかに、こころが洗われるようなストイックな豊かさを感じる。大きな木々は根を張りめぐらし葉を翠々とさせているが、草にとって必要な水分を得るのは容易なことではない。

Dehesaという言葉がある。もともとは、大きな木のある広いオープンスペースと意味だ。このプロジェクトで知りあったスペインの地理と生態系の学者から聞いたが、その分野ではよく使われる専門用語ということだ。ところが、日本の研究者が使うDehesaという言葉と、彼らが使うその意味には、専門用



語にも関わらず少しずれが生じているらしい。同行した日本のランドスケープアーキテクトは、Dehesaを、アフリカのサバンナのような風景というのだから、そのとおり、広いオープンなスペースという意味で用いていた。彼女がちゃんと勉強をしていたということだ。ところがスペインでは、農業や家畜の放牧のための牧草地という意味が強くなるらしい。同じ言葉が、非常にニユートラルな性格の空間を示すことも、人びとの生活に密着した機能をもった空間として認識されることもあって、使い次第では、全く違ったコンテクストを発生する良い例だった。乾季である夏は、人びとはパカンスで生き生きするのに、森の下草は太陽に焼かれたように辺り一面黄色であった。

(篠崎健一)

some 「いくつか」と several 「いくつ
か」ではどっちが多いでしょう? というの
はナンセンスな質問である

医者:

How many pints of beer do you have a day?

「ビールは一日に何杯飲みますか?」

患者:

I have some.

「飲みますよ」

医者:

So I'm asking you how many. You have several or
many, do you?

「だからどのくらいかと聞いてるんです。何杯かあるいは何杯
も飲むんでしょう?」

もしかしてこの患者さんが some を 2 ~ 3、あるいは 5 ~ 6 と
いった具体的な数だと思って使っているとしたら、それは誤り。

「いくつかの」と聞いて、あなたが真っ先に思い浮かべる単語は
何だろうか。some? それとも several? 確かにどちらも「いくつ
かの」と訳せはするが、その意味には大きなちがいがあ

まずは次の誤った説明を聞いてみてほしい。

some よ! several のほうがちょっと多めかな。「少し」の few
も一緒に並べてみると、

a few(2, 3) some(4 ~ 6) several(6 ~ 10) ってどこ

といったかんじだね。

この説明の根本的な誤りは、本来質のちがう some と
several をごっちゃにしているところ。合っているのは、a
few が「2, 3」ということだけだ。正しくは、2つのグループに分
けて分類すべき。

はっきりとした数ではないが具体的

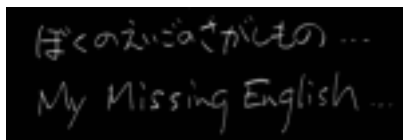
a few「少し」、several「いくつか」、many「たくさん」

ただの飾りで日本語にはならない

(1つのとき) some(2つ以上のとき)

つまり、some は a の同僚なのである。a が「ひとつ」
であることを示し、some は「ひとつではない」ことを
示す目印。それがお互いの分担である。どちらも日本語
にはない単語だから、訳す必要はない。「何人かの」を意識して
some を強く発音するとき、きっちりと訳さなくてはならないこ
ともあるが、多くの場合、some は「なんとなく」付けられている
飾りのようなものである。

一方で、つねにきっちり訳さなくてはならないのが several。具
体的な数のイメージのある「いくつか」「何人か」は、むしろ several
にふさわしい訳語である。



学校英語にわすれものありませんか?

いくらか例を挙げておこう。

Does Mr. Genji have a lover?

Yes, he has some lovers.

Really? How many?

Well, I don't know exactly, but maybe he has sev-
eral.

「ゲンジさんに愛人はいますか?」

「ええ、いますよ」

「ほんとですか? 何人?」

「そうですね、正確にはわかりませんが、たぶん何人かはいま
すよ」

だんなさん:

Today, I found some hairs gone again.

「今日、俺はまた髪の毛が抜けているのを発見したんだ」

おくさん:

How many have gone today, dear?

「今日は何本抜けてしまったの、あなた」

だんなさん:

Twenty-one. Do you think that's 'several' or
'many'?

「21本だ。それって“数本”だろうか? それとも“たくさん”
だろうか?」

some は2以上だから、「たくさん」と言えるぐらいの数のとき
にも使われる。

総理:

There are some idiots in this country.

「この国にはバカがいる」

秘書官:

Who, Mr. Premier?

「誰がですか? 総理」

総理:

Those who are against me.

「私に反対する連中だよ」

秘書官:

You mean those eighty percent, sir?

「例の80%のことですか?」

(最終面に続く)

(七面から続く)

また、数えられない名詞につくときの some は、ふつう「いくらかの」と訳すことになっていた。この場合、several との紛らわしさはないが、やはり飾りであることに変わりはない。だから、やはり強調して発音されるときを除いては、訳す必要はない。次の例では、secret が数えられる、money が数えられない名詞である。

ひと仕事終えて:

Now, I know some secrets of yours?

「えっと、あたしっておじさんの秘密知ってるってこと？」

顧客:

You want some money?

「おカネがほしいのかな？」

(望月)

Kanna
早稲田通り
中野通り
中野ブロードウェイ
中野駅

am/pm marusho
あいロード商店街
新井薬師前駅→

営業時間
平日・土曜日 11:30~15:00 / 17:30~25:00
日曜日 17:30~25:00
定休日 毎週火曜日 & 毎月第3日曜日

中野区新井1-30-6
第1三宮ビル1F
Tel: 03-5343-1316

プレオープン期間を経て、 10月15日グランドオープン!!

「自分の行きたいお店が欲しい」
呑むの好き。人と話すの好き。
酒好きの仲間とともに自分の理想の飲み屋を作りました。
飲み食いだけでなく、自作の美術品等の展示や、
ミニライブ、ろうどく劇等にもお使いいただけます。

(二面から続く)
やグラウンドや体育館には大きな時計がかけられているものだし、団地の広場にも時計はかかっていた。しかも、夕方になれば、チャイムが鳴るのをきつかけに、一人、二人、三人と、だんだん友だちは帰ってゆく。そんな生活では腕時計が何の役に立つはずもないことは歴然。逆に、役に立たないからこそ、ファッションだったのだし、その、子どもにとっての役に立たななき加減が大人の道具だ、という気にさせていた要素でもあった。

ところが、高校生になって学校に閉じこめることなく、好き放題にぶらぶらするようになる、だんだんと腕時計が重荷になっていったのである。まさに、「時計をすれば息苦しくなる」という有り様。時間など、どうにだって自由に使えるようになったとき、時計は束縛の象徴となったのである……カタクル

シクイエバ。そんなことをいつも考えていたわけでもないが、待ち合わせの時間を決めた途端に何となく不機嫌になったりして、周囲の人間にとってはいい迷惑であつたらう。約束する度に、私の気分が悪くなったとしても、時計には罪はない。当たり前だ。当たり前のことなのだが、どうもその辺りの切り分けが感覚的にうまく処理できない間抜けなお年頃だったのである。前述した携帯電話ではないけれど、使用する側なのか使用される側なのか、という問題。そもそも、そんなこつこつ突つかれるような嫌な気分にはさせられないのは、時計が正確な時刻を表示するからに他ならない(そのための道具なんですけどね)。ひどい逆恨みである。そこで、私は一計を案じた。時刻を適当に変えてみたのである、竜頭をぐるぐる回ると回してみて。ヴォワラ、私の腕では世界とは全く無関係な時を刻むようになったのである。あるときに

は、電池を抜いて、針はいつ見ても、三時四二分十七秒をさしたままだったり。こんな遊びを、周囲の人間は愚かだと思つたのか、クリイティヴだと思つたのか。そもそもそんな遊びを誰か覚えていてくれるのかな。

近頃、どういふ気紛れか、安物の時計をあれこれと購入して、取っ換え引つ換着用にと及んでいる。そんなことをしているうちに、昔懐かしい腕時計にまつわるあれこれ思い出したわけだ。そう思って、じつと眺めてみると、こんなインチキッぱいチープな時計にさえ、時間を縛る力が宿っているように見えるから不思議である。そうだ。今度、出かけるときには、暫く振りに動かない腕時計をしていこう。どうせ、気にしなきゃならないような時間の縛りなんて何も無いんだし。無職っていいよな。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記
からす新聞第五巻第十一号通巻第五九号、無事、発刊できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は二〇〇三年十二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

アリス

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野板上駅

アリス